TOPICS

人獣共通感染症談話会セミナー（第３回）“トリインフルエンザの理解と防疫”

さる10月28日動物衛生研究所講堂において、米国農務省南部家禽研究所長Swayne博士をお招きして、「鳥インフルエンザの理解と防疫」と題するセミナーが行われました。Swayne博士は、米国農務省の鳥インフルエンザの研究者であり、WHO，FAO，OIEの専門家も兼務する、獣医界を代表する本病の世界的権威です。今回は、アジアにおける発生を受けて大変お忙しい中、韓国獣医学会での講演の後に動物衛生研究所に立ち寄って頂き、講演をしていただきました。

27日午後7時に成田空港に到着された博士を出迎え、官用車でホテルスワまでお送りしました。講演当日は、先ず清水所長、谷口企画調整部長にご紹介した後で、動物衛生研究所の専門家との情報交換を行いました。動物衛生研究所からは、本年79年ぶりに発生した本病の発生状況と、動物衛生研究所でこれまでに得られた研究成果を博士に紹介しました。博士は世界を飛び回っておられ、新しい情報が豊富なため、適切な助言を頂くことができました。

その後、「絹の木」で谷口企画調整部長、山口感染病研究部長、犬丸免疫研究部長、病原ウイルス研究室3名で、博士と昼食を取りながら歓談しました。博士は、ジョージア州アトランタ市にある研究所の郊外に広い庭付きの家を持ち、奥様と2人のご子息と暮らしておられ、ワイルドライフと野菜作りが趣味の自然派嗜好の研究者で、愛用車は三菱パジェロとのことでした。

講演は午後2時から約80枚のスライドを用いて3時間かけて行われました。講演内容は、アジアにおける発生、米国における発生、防疫対策、ワクチンの4テーマを事前にお願いしていた関係で、これに沿った内容になりました。聴衆としては、中央行政部局、地方行政部局、産業獣医師、養鶏関係者、研究所関係者で、約150名が講演に熱心に耳を傾けていました。博士は、本病の対策は、1）関係者の教育、2）衛生管理、3）サーベイランスと診断、4）発生場所からのウイルス撲滅の4要素から構成される総合的なものであることを強調されていました。日本で議論になっているワクチンの使用については、ウイルスの撲滅を効率的に推進するための一手段に過ぎず、使用農場は監視が必要とのことでした。多く発生を経験している米国の防疫方針と、また日本の防疫方針が一致していることは心強く、その重要性を再認識できた聴衆は多かったと思われます。最後の30分間の質問時間には質問数が多く、事務局の英語力不足もあって、十分な質疑応答ができなかったことは大変申し訳なく、また心残りではありますが、活発な意見交換ができたと思います。

最後に、有意義で実り多い本セミナーを開催できましたことは、関係部長、研究交流科、会計課、人獣セミナー幹事会、研究室、その他多くの方々のご支援、ご協力のおかげであることは言うまでもありません。この場をお借りして、関係者の皆様に深くお礼申しあげます。今後とも共同研究等を通して博士との交流を深めていきたいと思います。

（感染病研究部　塚本　健司）